



史傳

大題小題二 (承前)

米 漢

サーモビレーの戦

戦は始まりぬ、衆によりて進むもの、争でか奮
 死の義兵に敵せんや。波斯の大軍、雪積をうつて
 逐ひ退けらるゝもの幾回、將校は鞭を擧げて軍を
 督し、篋て之を驅る。

憐むべし、波斯無辜の民、退ては味方の鞭頭上
 に閃めき、進みては希臘の槍刀眉目の間に輝く、
 槍の穂先に命を落すもの、海に逐ひ落さるゝもの
 泥土の裡に顛するもの、死傷數なく、大軍數々色

めく。然れども雲霞の如き敵兵、到底盡くべくも
 わらず。希臘人の槍は遂に折れぬ。刀は鋸の如く
 なりぬ。曉色既に明かにして、殘燈獨り明滅す
 るが如し、而して、レオニダス先づ屠腹して、自
 殺の桶を作りたり。

戦は愈劇しくなりぬ。屍の山、血潮の海、乘
 り越え、踏み超え、鋒鏑劍戟、右に靡き、左に
 漂ひ。矢叩びの音、馬蹄の響、煙塵高く捲て天日
 暗からんとす。ザーキジスの兄弟なる、波斯の二
 皇子も、遂に此處に斃れぬ、偶々軍中相傳ふ。ハ
 イダーチス既に山逕を越えぬと。希臘兵の後方は
 塞がれぬ。殘兵今や全く囊中に在り。

スパルタ人と、セスビアン人は、胸壁内の小丘
 に退き、此處を最後の戦場となさんとせり。然れ
 ども、シーベンス人々に従はず、獨り波斯軍に投

じ、哀求降を乞ひしが、不忠不信と烙記せられて漸く命を宥されぬ。而して、奴隸は、大抵、此の時山上に逃避せるなるべし。

而して決死の士、身を顧みざるの一隊は、陵側に立つて尙頻りに戦ひぬ。槍折れ、矢亦盡く。劍を抜て戦ふもの、匕首を振ふもの、徒手齒を以て敵に當るものあるに至り。日既に春くに及びて、希軍又一人の存するものなく残るは唯、蝟の如く矢を蒙むれる死屍の丘陵をなして横はれるのみ。紀元前四百八十年、葉月の片破月、獨り青し。

波斯人二万、亦命を此土に委しぬ、ザーキジスデマラタスを召して問ふて曰く、斯かる精悍の兵尙は幾許かあるべきかと。デマラタス答ふるに八千を以てす。サーキジス胸中の苦悶知るべきなり。

サーキジスは是に於て、艦隊より廷臣を招き、彼に對しては、假令、勇敢なる戦をなすとも、遂に斯の如くなるべきを誇示せんが爲、十字架に縛せられたる、レオニダス及び、スバルタ人の死屍を示しぬ、ザーキジス、始め、一千人以上を屠殺することを禁じたりしに、今是の如し、蓋し此の一擧の如きは、其の精神の昏衰によるにあらざらんや。

勇敢なる王の死屍は、他の戦死者と共に、其の陣歿の地に葬むられぬ。

アリストデマスは、病によりて戦場を退きしが總て、彼の土人士に齒せられず、唯卑劣漢と呼びて、其の名を稱するものもなく、一把の大、一掬の水をも恵むものなかりしかば、徒らに、死者の英魂を羨みしが、其の後一星霜、波斯軍最後の侵

入に於て、最も見苦しき失敗に歸したる、プラチ
 ーアの戦列に加はり、勇敢なる戦をなし、以て漸
 く其の汚名を雪ぎぬ。

國難全く攘ひ盡して、希臘の半島、再び平和の
 諸、長閑なるに及び、國人、皆、叢爾たる半島の
 運命を双肩に擔ひて、潮の如く侵入せる外寇を支
 へ、地中海頭の小邦をして、泰山の安きに居らし
 め、一死國に殉じて、英魂尙生けるが如く人心を
 照らせる、壯烈なる忠死者の爲に、吊魂の誠を致
 さんとし、此の偉蹟をして、永く國民の念頭に新
 ならしめんが爲に、圓き標柱二を此の地に建設せ
 り一基は胸、一基は、胸壁の外に在り、此の地、眇
 たる孤軍克く波斯の攻撃を退くるもの兩日、戦
 最も激烈を極めし所。以て全軍の精忠を表す。銘
 に曰ふ、

ヘロップの兵四千、此處に、敵の三百萬と勇
 敢なる戦をなしぬ。

他は、スバルタ人の表忠碑なり、銘して曰く。

通行く人よ。冀くば、行てスバルタの人に告

げよ。命を守りて、我等は此處に斃れたり。

最後の戦をなしたる丘上、石獅の像を安ず、乃

ち勇猛獅子の如しと呼ばれたる、レオニダスの紀

念碑なり。

歲月悠悠運りに流れ去て、石獅標柱已に既に其

の影を止めず。サーモビレーの勝形、亦桑滄の變

に迹を失ひ、デタの山脉と、曲江の間は、陸地相

接して、温かさ泉の名殘今將た尋ねんよすがもな

し、否々、獨り、銅柱と石獅とのみならず、兵士

の夢の跡、吊はんとするも、夏草の茂みの其處さ

へ定まらず思束なきも、唯、レオニダスの名は、

異との國くにのはしくく迄まで、薰かをらぬ限くまもなく、星霜せいそう茲こゝに

二千三百有餘年ちゆうえねん、波荒なみからき穢けいの邊はたりの木きの下もとに、英

魂こん長とへに眠ねむれるも、精靈せいれい宇内うちを照てらして、人心じんしんを

鼓舞こぶするもの果あたして幾許いくげすや。(完)

附言 大題小題なる名の下に誠に断片的の材料を蒐集し既に此

の紙上に掲載せるものも数次なるか少し思ふ所もあれば一先

此の稿は此處に筆を收め機あれば別に題を改めて相見ゆるこ
と、いせんとす請ふ諒せられよ。



文苑

わが里

佐々木信綱

水車ゆるやかにめぐり
にはとりはがらかにうたふ
あらしの聲きこえず
ねたみのちりもこゝにこず

のどかなるかなわが里
門をめぐるいさゝ川
流ゆるく水きよく
底の小魚も數ふべし

じづかなるかな我やど